

econ. No. 43

特集座談会

ウィズ・コロナの大学生活

～授業・就活・大学に対して学生が思うこと～



連載 interview

OG 訪問—働きウーマン 26

河崎秋子さん (5ページ)

連載column

蒼天碧空 2

濱田武士先生 (6ページ)

連載

私の履歴書

柁木貴之先生 (7ページ)



連載column

From a Distance 15

大屋定晴先生 (4ページ)

news 1 基礎ゼミプレゼン大会

上園昌武先生 (6ページ)

news 1 ゼミナール論文中間発表会を開催

浅妻裕先生 (6ページ)

news 2 2020年度 地域研修報告会

浅妻裕先生 (8ページ)

news 2 活動成果を冊子で発行

地域協働フィールドワーク

水野谷武志先生 (8ページ)

news 2 2021年就職活動が本格化

逸見宜義先生 (8ページ)



写真右下:「現場実践型」授業の地域協働フィールドワークでは、天売島の魅力を自ら発見して島の内外に伝えることを目的にした小冊子「学生の天売島観光ガイド てうりたび」を発行しました。(8ページ news 2)

発行: 北海学園大学経済学部地域協働推進協議会

特集 ウィズ・コロナの大学生活

～授業・就活・大学に対して学生が思うこと～

新型コロナウイルスの蔓延により、大学生活が大きく変わった2020年。学生はどのように学び、毎日を過ごしてきたのでしょうか。オンラインでの授業や就活などこれまで例のない状況を経験し、不安も大きかったのではないのでしょうか。1年生から4年生に集まってもらい、コロナ禍での授業や就活、そして大学生活について、思っていることを自由に話してもらいました。

※座談会は、換気や消毒、マスク着用などコロナ対策を万全にした上で実施しました。[2020年12月12日に実施]



<司会>
藤田知也 先生 神山義治 先生

<出席者> 1年 石倉誉士さん 歌代基礎ゼミ
2年 今村星奈さん 西村ゼミ
3年 佐藤圭吾さん 宮島ゼミ
3年 元沢敬介さん II部鈴木ゼミ
4年 石崎七菜子さん 濱田ゼミ (誌上参加)

オンライン授業で変わった毎日

司会 コロナ禍以前と比較して、学び方はどう変わりましたか？

元沢 多くの授業がオンラインになって同級生と会わない時間が増え、情報交換できる場が少なくなりました。でも、だからこそメールなどで先生とのコミュニケーションが増えたと感じます。

佐藤 僕の場合はモチベーションが上がリません。以前は授業でわからなかったことなど友達と話し合っていました。家で、一人で授業を受けるとなるとやる気が出ないです。

今村 授業のほかアルバイトや友達と遊ぶという生活リズムが崩れてしまいました。ただ、暗記に頼りがちな筆記のテスト

と違い、評価がレポート中心だと深く調べるようになり知識が身についていると感じます。また短期間でしたが、私の所属するゼミ

では、夏休みの期間に上川の東川町へ地域研修に行きました。事前

学習として何度も全員で集まり、準備を進め、研修先では最終日に50枚ほどのパワーポイントを作って町民の皆さんに発表しました。短い期間でこれだけの量の資料を作り、発表するのは大変でしたが、オンライン授業で思い出のない1年間において、こ

の経験こそがしっかり脳に焼き付き、忘れられない研修になりました。

司会 1年生の石倉くんは、思い描いていた大学生活と相当ギャップがあるのでは？

石倉 大勢での授業形式を想像していたので、動画を眺めるだけになったのは驚きました。Zoomで顔を見て発言できる授業もありますが少人数。それに、対面なら先生が反応を見ながら授業を進めると思いますが、オンライン授業はメリハリがなく平板に感じます。今は2年生から始まる専門ゼミがどうなるのか気になります。

司会 学業以外で変化したことはありますか？

元沢 毎日サークルで上級生や下級生とも会う機会が多かったのに、今は人数制限して活動しています。写真部ですが、密になりやすい現像作業はできないなどの支障も出ています。飲食店でのアルバイトも、週4、5日だったのが週1日まで減って、生活リズムが大きく変わりました。

佐藤 就活を始めたいと思っていますが、友達と会わないので話もできず、刺激が全

然もらえなくて焦るばかり。インターンシップに行くなど、もっと就活したかったんですが…。

今村 今はゼミだけ対面ですが、ゼミの中でも先輩など全員と関わるができない状態です。私はサークルに入っていないので、2年生になったらゼミが始まって先輩との交流が深まり、就活のことも聞けると思っていたんですが、ほぼ関わることなく1年間が終わってしまいました。

石倉 自分の場合、大学で友達ができないというのがありますが、家にいる時間が長くなり親の手伝いをするが増えました。

司会 みんな授業はほぼオンラインのようですが、ずばり、オンライン授業ってどうですか？

元沢 一方的に講義を受けるのが多いので、モチベーションを保つのが難しいです。また、オンラインの次に対面があると通学時間と重なってしまうので、2部なのに早い時間に大学へ行かなければなりません。

佐藤 録画配信（オンデマンド）だと「見るのはいつでもいいや」となりがち。でも、スピード再生できるのでちょっと早く終われる（笑）。あと、わからなかった部分をリピートできるのはいいところです。

今村 私の場合、授業は全部録画です。だから課題のレポートがあるときにまとめて見てしまったり…。

石倉 自分も基本的に、配布資料に基づいた小レポートの提出か、YouTubeにアッ



●司会/交通経済論
藤田 知也 先生



●歌代基礎ゼミ
石倉 誉士さん



●西村ゼミ
今村 星奈さん



●II部鈴木ゼミ
元沢 敬介さん



地域研修西村ゼミ



対面・オンライン併用形式の授業／労働経済論（右上列⑤も）

学内入口には自動式消毒液・サーモグラフィ・ハミングバードセンサー⑩を設置し、教室は必ず1メートル以上の距離をとれる感染防止対策人数の座席数とし、消毒・換気を励行しています⑩。これらの対策をとりながら、受講者の意向に配慮しつつ担当者の裁量で、対面授業③④⑤⑥・ハイブリッド授業・オンライン授業を実施しています。

プされた動画による授業です。ただ、パワーポイントの音声付き動画は、必要な部分を聞き直したいと思っても、スマホでは最初からじゃないと聞き直せないのが不便でした。

司会 春の自粛期間中は、どのようにメンタルを保っていましたか？ 落ち込むことはあった？

佐藤 一人暮らしですが、札幌にいる地元の友達とたまに会うことで気分転換になりました。



● 宮島ゼミ
佐藤 圭吾さん

元沢 友達との電話や、オンライン飲み会などでコミュニケーションをとることで、気持ちがつながっている感じはありました。

今村 私は家族と過ごす時間が増えて、新たな発見がありました。また、料理など今まであまりしなかったことに挑戦できたのは良かったと思います。

石倉 オンラインゲームの友達とコミュニケーションが取れていて、家にいても家族以外で話す人がいたことで、メンタルはあまり下がらなかったかもしれません。

司会 アルバイトしている人は、どんな影響がありましたか？

元沢 シフトが大幅に減りました。休業補償もそんなにもらえないので、貯金や奨学金を切り崩しながら生活しています。Go Toイートが始まったときはシフトも増えましたが、今はほぼ働いていない状態。国の「学びの継続」のための『学生支援緊急給付金』で本年後の授業料は払えても、次年度の授業料が不安です。

佐藤 僕は飲食店ですが、以前とそんなに変わりません。ただ、ウーバーイーツやテイクアウトなど新たな試みが負担な部分もあります。

今村 私はアパレルで変わらずアルバイトできていますが、接客が怖いというのはあります。

これまでと違う就活への不安

司会 業種によって、また、同じ飲食関係でも状況が違うんですね。では、就活についてはどうでしょう。

3年生の2人はとくに不安を感じているのでは？

元沢 夏休みにインターンシップに行きましたが、オンラインだったので“行った”感じがしません。実際に行かないと、職場の雰囲気などわからない部分が多い。メリットは、全国の学生が参加していて、それぞれの地域文化をベースにプレゼンテーションして交流できたことです。

佐藤 インターンシップにも選考があるようだし、簡単に行けなさそうなのが不安です。でも、オンラインなら道外の企業でも気軽に受けられるのはメリットかも。そう考えたら選択肢も広がるし悪いことばかりじゃないのかなと思います。

元沢 でも、とにかく不安でなにをどうしていいかわかりません。キャリアセンターのGIPという就活準備のためのプログラム



● 司会／社会経済学基礎
神山 義治 先生

を受けていますが、一人で就活するのには限界があります。みんなどのくらい進んでいるのかもわからないし。

佐藤 そう、わからないと焦るだけでいい刺激にはならない。友達に会って話せると、お互いにどのくらい進んでいるのかわかり、いい刺激になるのに。

司会 今の4年生はこれまでの就活とまったく違う状況ですが、内定にこぎつけた人（石崎七菜子さん）もいます。4年生に聞いてみたいことはありますか？

佐藤 オンライン面接のポイントや気をつけるべきことが知りたいです。

元沢 説明会は何のくらい行けばいいのか。就職情報では平均何社と出てきますが、コロナ禍以前のデータなので、大きく変わったのか気になります。

ウィズ・コロナ時代の大学生活とは

司会 大学のコロナ対応について改善してほしいことはありますか？

佐藤 春ごろに対面授業になるかもしれないというお知らせが2度ほどあった気がします。対面になるのを期待していたら、結局そのままオンライン授業でした。最初から前期は全部オンラインと決めてくれば、多少気持ちの準備ができたと思います。



● 濱田ゼミ
石崎 七菜子さん

3年生から公務員のみを志望していましたが、コロナ禍の影響で例年とスケジュールが全く異なり、就活の参考がないことが一番大変でした。特に、国家公務員を第一志望としたため、国家系の試験が延期してしまった際には勉強のモチベーションの維持に戸惑いました。また対面式の官庁の説明会や業務セミナーなどが全て中止となり、仕事について深く知ることが難しいと同時に行きたい官庁に自分をアピールする場も減りました。ただ、オンラインでの面接や官庁説明会など新たな機会も多く、自分から行動することが苦手の私が行動し、積極的なアピールに挑戦できた就活でもあったと感じています。今後の就活も大変だと思いますが、情報を手に入れる機会や自身をアピールする機会を大切にしてほしいと思います。

あと、たまに資料の印刷でパソコン室を利用しますが、台数を制限している分、いつも席が埋まっています。定期試験のレポート提出時はとくに使う人が多いので、30分以上並びました。せめて試験前、レポート前だけでも使える台数を多くしてほしいです。

元沢 北海学園内で感染者が出ているときに、ホームページに少し書いてあるだけだったことです。学生はほぼG-PLUS!(*1)とLMS(*2)しか見ないので、G-PLUS!に感染者のお知らせを追加してもいいのでは。状況が把握しにくいと思います。

石倉 自分も、すぐ隣の高校でクラスターが発生しているのに、G-PLUS!などでお知らせがまったくなかったのが不満でした。学生にオンライン授業への意識を持たせ、登校するかどうかの判断材料にさせるべきだったのではないのでしょうか。

司会 最後に、ウィズ・コロナ時代の大学生活はどういうものになっていくと思いますか？ 対面授業に戻ってほしい？ それともオンラインのままでいい？

元沢 2021年の学校祭もどうなるかははっきり決まっていなくて、サークルや協議会など行事で使う予算も、ある程度見通しが

立たないと決めるに決められない。授業だけでなく、サークル活動や課外活動にも改善が必要だと思います。

佐藤 1年生は大学生活を楽しむ機会がなくてかわいそうですが、感染者が落ち着いて、また増えての繰り返しで、今のような状態が日常になっていくのかもしれません。

今村 ゼミで行った地域研修以外は、なにを学んでいるのかわからない1年でした。早く元に戻ってほしいです。

石倉 自分はコロナにかかりたくない気持ちが強いので、対面に戻されても「行きたくない」という選択肢になってしまいます。オンラインと対面が選べて、ワクチンなどで感染リスクが低くなってから一斉に対面に戻されるほうが安心できます。

司会 今、学生は思っていることを口にできる機会がないかもしれませんね。教員側として初めて知ることもありました。ありがとうございました。[以上敬称略]



写真上：左から、神山義治先生、石倉誉士さん、今村星奈さん、元沢敬介さん、佐藤圭吾さん、藤田知也先生
写真下左：コンピュータ実習室、中：菊田基礎ゼミ、右：牛久基礎ゼミ

*1 G-PLUS!
学生総合支援システム。
履修登録やシラバスの
確認、大学からのお知らせ受信、メールの送受信などができる。

*2 LMS
学習管理システム。
出欠確認や課題提出などができる。



From a Distance 15

真冬の怪談話ならぬ実話である。

仕事帰りが夜遅くなった2021年1月のある日、一台のタクシーに乗った。すると、いつしかタクシー運転手はこう口にした。「コロナは自然現象ではない。すでに昨年2月にワクチンを中国は開発していて、そのうえでコロナを世界に拡散した。」「バイデンは国家反逆罪で捕まる。トランプはアメリカのディープ・ステイト（闇の国家）と闘ってきた。そして最後にトランプは勝つだろう。」「マスコミはこれを報じない。でもネットには書いてある。」

——これらの情報は確認された事実ではない。

中国がワクチン開発していたなら、この同じ1月に北京で百万人規模のロックダウンを命じる必要はない。またアメリカ陰謀論者（Qアノン）の言葉に反して1月20日にバイデンは大統領に就任した。

ネット陰謀論に抗する力

だが新型コロナ感染拡大、生活不安、対人関係の希薄化のなか、ネットの陰謀論的言説に人々がふれ、ついには「世界の秘密」を普通の会話で語り始める。——これが今の日本の現実である。

だからこそ大学の意味が改めて問われる。「大学」(University)の語源はラテン語の「全体、宇宙」(universus)に遡る。とすれば大学とは「全体」を知るために多角的に検証する場だ。だからこそ私たちは自然科学も人文・社会科学も網羅的に大学で学べる。アメリカや中国の実態を知るには、英語も中国語も必須であり、こうした語学を学ぶ機会も大学は備えている。

●大屋 定晴 [経済学部教授]

いくらネットで情報を手にしたとしても、この情報を全体的に吟味する多角的な力がなければ意味をなさない。オンライン授業という新たな課題を踏まえながら、この多角的力を大学でどのように培うのか。

これが今の私たちにも問われている。



1991モスクワ photo: I.Sasaki



photo: 村田フォトスタジオ

羊か、小説か、どちらかを 選択しなければならないのなら、 小説だと覚悟を決めた。

河崎 秋子さん

かわさき あきこ

別海町で羊飼いをしながら小説を書き、2015年『颯風（ぐふう）の王』で作家デビューした河崎秋子さん。15年続けた羊飼いを辞めて住まいを十勝に移し、専業作家の道を歩み始めている。



羊との出会いは大学時代

作家デビュー後、『肉弾』『土に贖（あがな）う』『鳩護（はともり）』と、続けて作品を上梓している河崎秋子さん。大学に入学した当初は意外にも「普通に会社員になろうと思っていた」と言う。

「あわよくば小説を書いてみたいと思っていましたが、さすがにあの時点では小説家になれる自信は全くありませんでした」

大学の文芸サークル「文学会」に入り、それなりに小説を書く練習をしたものの「自分には才能も思想も基盤もない」と痛感。一方で、知人に誘われて参加した集まりで羊肉に興味を持った。「道内産の羊肉を取り寄せて、みんなで焼いて食べたら、これがとてもおいしかったんです」

別海町で酪農業を営む家に生まれ育った河崎さん。酪農の経営は既にシステムチックに確立されているのに対し、羊の飼養は経営や販売も手探りで、いろいろ試せる余地があるのではないかと魅力を感じた。「牛と違って羊はサイズが小さいので、女一人でも扱えるんじゃないかと考えたのも理由のひとつです」

卒業後は、本場を見てみたいとワーキングホリデーでニュージーランドに渡り、牧場に1年間住み込み。帰国後は道内のめん羊牧場を見学したり、実習させてもらったりしたうえで実家の敷地の一角で羊を飼いはじめた。

暗中模索の果てに作家デビュー

家業の酪農を手伝いつつ、羊を2頭から増やしていき、販路も自ら開拓。羊飼いととしての経験を積み重ねながら、河崎さんは

30歳を節目に再び小説を書き始めた。「いま書かなければ、きっとこのままだったら書かない」と、自分を奮い立たせたのである。

最初に応募した北海道新聞文学賞で最終選考に残り、翌年に佳作、翌々年に「東廼遺事」で本賞を受賞。その後、明治から平成まで、北海道の開拓移民の歴史を基底に織り交ぜながら6世代にわたる馬と人との交感を描いた長編『颯風の王』で三浦綾子文学賞を受賞して、念願のデビューを果たした。

「暗中模索の時期が長かったんです。このまま箸にも棒にもかからず、一生作家志望のままで終わるのかな、と。そういう不安との闘いでした」

デビュー後も羊飼いと並行して小説を書き続け、二作目の『肉弾』で大藪春彦賞、三作目の『土に贖う』では新田次郎賞と、立て続けに高い評価を受ける。『土に贖う』は、河崎さんが「生き延びるために汗水たらして働かなくてはならない世界、職業の肉体性を書きたかった」と話す作品。養蚕や薄荷栽培など北海道にかつて栄えた産業の衰退を、そこに働く人の物語として描いた短編集だ。取材にはかなりの時間をかけたが「歴史と経済のつながりなどは、大学時代に必修科目だった地域経済の知識がわりと生きている気がします」と、大学での学びについても振り返ってくれた。

作家一本でやっていく覚悟

河崎さんは2019年末で羊飼いを辞め、専業作家の道を選んだ。

「羊飼いを15年やっていましたが、小説を書くようになってからは寝る時間もなくて。家族の事情もあったのですが、自分の人生の中で選択しなければならないとなれば、羊よりは小説だなと最終的に決めたわけです」

今は十勝に住まいを移し、執筆に専念する日々を送っている。

「コロナ禍で取材に行けないというマイナ

ス面はありますが、仕事は基本的に家で一人。究極の在宅ワーカーですよ、作家って」一方で現在厳しい環境に置かれている学生の毎日にも気は掛けずにはいられない。「特に就職をひかえた人は不安でしょうけど、今は生きてるだけで満点。すでに十分頑張っていると思うんです」

思うように身動きがとれない状況だからこそ「まずちゃんとごはんを食べ、しっかり寝て、今後に備えよ、と言いたいですね」

失敗を恐れるな

河崎さんに後輩たちへのアドバイスを求めると、次のような言葉が返ってきた。「私が何か言えるとしたら、失敗なさい、ということですかね。若いうちの失敗は糧になる。自分も恥ずかしいことをたくさんして、人に迷惑もかけたので、今その年代の人たちには寛容になります」

羊飼という仕事に挑戦しながら、小説を書くという希望を手放さなかった河崎さん。「いろんな人と会って、いろんな人の話を聞いて、自分の人生に重みが出てきたら、そのときあらためて筆をとれば、何か書けるんじゃないか」という思いをずっと抱えてきた。

目指すところへまっすぐに向かえなくても諦めない。紆余曲折しながらでも希望は捨てない。ウイルスという目に見えないものと闘わなければならない今はなおさら、河崎さんの歩んできた道のりや作品が多くの人を励ますのではないだろうか。



photo: 村田フォトスタジオ

profile

1979年 別海町生まれ
1997年 本学経済学部経済学科入学
2002年 卒業後ニュージーランドの牧場に1年間ファームステイ
2005年 家業の酪農を手伝いながら羊を飼いはじめる
2012年 「東廼遺事」で北海道文学賞を受賞
2014年 『颯風の王』で三浦綾子文学賞
2019年 『肉弾』で大藪春彦賞、羊飼いを辞め作家専業に
2020年 『土に贖う』で新田次郎賞

▼『土に贖う』集英社刊



[令和2年12月1～24日] 1部・2部基礎ゼミナール

基礎ゼミプレゼン大会が開催される

今年度はコロナ禍の影響でゼミナール協議会主催のプレゼン大会が中止となりましたが、12月に1・2部の基礎ゼミ合同で曜日に分かれてプレゼン大会を実施しました。各ゼミで3～4チームに分かれ、1チームのプレゼン10分、質疑応答と教員からのコメント10分、計20分で報告が行われました。会場によっては、対面式とオンラインが併用されました。

報告テーマは、消費増税や国債、コロナ禍による経済動向や企業業績への影響、核のごみ処分や廃棄物問題、札幌一極集中や過疎高齢化問題など幅広い内容が扱われました。入念に準備されたプレゼンや、鋭い質問や指摘が繰り返されました。参加者は全員1年生なので、共同作業による報告づくりや、数十名の前のプレゼンや討論が初めての経験だった人が多かったはず。この経験を活かして、2年次以降のゼミナールで、より深みのあるプレゼンと建設的な討論が行えるようにステップアップしてほしいと願っています。[上園]



幅広いテーマが取り上げられた、本格的なプレゼン大会となりました

[令和2年12月19日] 1部・2部ゼミナールIII

ゼミナール論文中間発表会を開催

12月19日(土)、ゼミナール論文中間発表会が開催されました。2019年度に続き、第2回目の開催となります。

この発表会は、4年間の研究の集大成ともいえる「ゼミナール論文」(1月末に学部提出)の進捗状況を、ゼミの指導教員とは異なる教員に対して報告するもので、執筆のモチベーションを高めるための重要な機会となっています。

当日は、5会場に分かれ、14名の4年生が出席しました。出席学生は、研究目的や研究の背景、既存研究の整理、全体の構成、直面する課題等について、熱心に報告しました。進捗度には差がありましたが、悩みながらも、よい論文を書き上げようとする意欲が伝わってました。同一会場の学生との活発な議論があったことも特筆すべきことです。

2020年度までは試行期間であり、発表義務は課されていませんでしたが、2018年度入学生が4年生となる2021年度からは、「卒業研究中間発表会」として本格的な運用が始まります。[浅妻]



各会場とも論文作成の仕上げに向けた、活発な議論が行われました

蒼天碧空②

～経済学部教員の活動報告～

「釧路町との産学官連携」

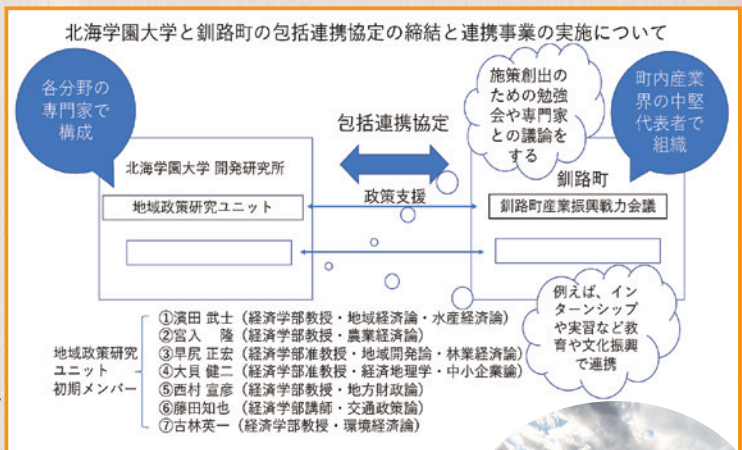
● 濱田 武士 [経済学部教授]

本学では自治体や企業などと包括連携協定を結んでいます。大学と地域あるいは企業と連携して事業を行うためです。そのうちのひとつ、2019年12月18日に締結した釧路町との連携の話を知りたいと思います。

釧路町では、地元民間人を構成メンバーにした「釧路町産業振興戦力会議」が立ち上げられました。この会議は異業種連携をすすめることを目的としています。異業種連携とは、農林水産業や観光業あるいは製造業など異なる既存の業界が組むことによって生み出す新ビジネスのことです。釧路町は、釧路湿原など景観の名所があり、また農林水産業もあって食資源も豊富です。釧路市という大都市部に隣接し、JRや空港へのアクセスも悪くないことから企業誘致するにしても、観光誘致するにしても決して環境は悪くないです。しかし、ホテルなど観光施設はなく、観光客や出張客が来

ても滞留せず素通りするだけなので地場産業への経済波及がありません。他方で農村、漁村部は他地域と同じく、少子高齢化が進み、過疎化が進んでいます。こうした状況を打開するために、それぞれの産業が個別でがんばるのではなく、連携事業を立ち上げ、新たな経済循環を創出しようというのが「釧路町産業振興戦力会議」の狙いとなります。

本学との包括連携事業では、この試みをバックアップする組織として「地域政策研究ユニット」を経済学部地域経済学科の教員で組織し、地域政策を創出する「産学連携」スタイルを試行することになりました。



「地域政策研究ユニット」のメンバーは必要に応じて調査・考察を行い、その知見を「釧路町産業振興戦力会議」の政策創出プロセスに活用することになります。コロナ感染拡大でストップしていましたが、今年から活動が本格化します。





私の履歴書

柁木 貴之 経済学部准教授
[言語教育(英語教育、国語教育)]
まさき たかゆき

経歴

札幌市出身
博士(学術) 東京大学
東京理科大学英語非常勤講師、
明治学院高校国語非常勤講師を経て
2020年4月より現職。

主な研究業績・著書

近著に『『論理国語』と『文学国語』で記述力を育てる—「現代文」における授業内
添削を例に—(『月刊国語教育研究』583: 28-31, 2020年)、
『国語教育と英語教育をつなぐ—「連携」の歴史、方法、実践』(東京大学出版会、
2021年刊行予定)
* 論文ではありませんが、『図書館だより』224号に「大学で英語を学ぶ意味」
という文章を書いたので、ぜひ読んでください。



大学3年、ESSの仲間と

5年後の自分を想像する

小学校5年生のとき

2019年12月9日。私は北海学園大学の最終面接を翌日に控えていました。本来なら部屋で静かに精神統一を図るべきところですが、私の姿は紀伊国屋書店の札幌本店にありました。この日、北海道日本ハムファイターズの栗山監督の講演会があり、参観していたのです。講演の中で、監督は選手たちに「常に5年後の自分を想像しなさい」と言っていることを知りました。私はその言葉に深く賛同しました。振り返ってみると、私自身も常に4,5年後の自分をイメージして人生を送ってきたからです。

初めて5年後の自分を想像したのは小学5年生のときです。このとき、私は札幌南高校に入学し、自由を謳歌するのを夢見て、塾に通い始めました。その成果もあり、中学校では栄華を極めました。3年間、ほぼオール5をキープしたことで、内申点は304/315のAランク。勉強もスポーツもできる生徒会長として君臨し、3年生最後の定期試験では5教科500点満点のうち、485点を取って学年1位。高校入試で272/300点を取り、卒業式では我が物顔で全校生徒の歌う「時の旅人」を指揮した後、南高に入学しました。

栄枯盛衰

しかし栄枯盛衰とはよくいったもので、高校に入った私はさっそく没落します。最初の実力テストは400人中300位くらいでした。所属したハンドボール部では人間関係に悩みました。一個上の先輩方が偉大で、一個下の後輩も強く、私の代はいわゆる谷間の世代でした。今も昔もホワイトアスパラのように色白でペラペラな私に、肉体的な強さが重要なハンドボールは不向きでした。それでも真面目に頑張った結果、学力が崩壊し、浪人してしまいました。

悲しいことに、浪人時代は3年も続きました。

しかも、3浪のある日、車にはねられてしまいました。これはとても痛かったです。15メートルくらい吹き飛ばされました。…というのは、実際は2,3メートルくらいだったと思います。落ちた場所が中央分離帯のリング並木の草地上だったため、致命傷は負わずに済みましたが、左脚を負傷、首はむち打ちになりました。運転手の方がすぐに119番してくれましたが、「救急車は出払っているらしい」という謎の理屈で、私は加害者の車で病院に運ばれていきました。このとき、どこかの森に捨てられていたら、今、この文章を書いていなかったと思います。

こんな暗い浪人時代でしたが、偏差値は60から75に上がり、全国1位になりました。その原動力になったのは、国語と英語です。私はあるとき、二つの言語は説明文の構成が似ていると感じました。例えばそれは、「主張→理由」「抽象→具体」「譲歩→逆接」といった構成です。二つの言語は違いが大きいけれど、違いは違いで楽しみながら、似ている部分を関連付けて学んでいけば、国語と英語の勉強に相乗効果が生まれる気がしました。そのことを予備校の古文の先生に話したら、「それはとても面白い発想だし、何より柁木は国語も英語も好きなのだから、大学では両方の勉強をしなさい」と助言してくれました。

大学院に入ってリベンジ

結局、志望校の東大に入ることはできませんでしたが、4年後は絶対に東大の大学院に入ってリベンジしようと思いました。このような決意をもって早稲田大学に入学した私は、英文学専修に進学し、実際に英語を使うため、サーク



大学1年、ディズニーランドで

ルはESSを選びました。教養科目は興味のおもむくままに選択するのをやめ、日本文学専修の授業を集中的に履修した結果、国語と英語、両方の教員免許を取得することに成功しました。

4年間、準備に準備を重ね、やっと迎えた東大の大学院入試は、まったく落ちる気がしませんでした。そして実際、合格しました。4月に入学者の集まりがあったときに、私の後ろの席で受験した同期から、「君は絶対に合格すると思った。背中から青白い炎が出た」と言われました。私は炎の使い手ではないので、そのような指摘は「よもやよもや」ではありますが、このときほど、4,5年、努力を積み重ねることの重要性を感じたことはありません。

大学院では先輩たちのレベルの高さに驚愕しました。東大の博士課程の優れている点は、先生がすごいという点はもちろんのこと、年の近い先輩の中に「この人は将来、この分野で日本一になるんだろうな」と思わせる人が何人もいることです。そんな先生と先輩方にもまれながら、5年で博士論文を仕上げることを目指しましたが、結局、10年かかって、やっと「国語教育と英語教育の連携—その歴史、目的、方法、実践」という博士論文をまとめました。その後、北海学園大学に応募することになったわけです。

最終面接に合格してまもなく、世界は一変しました。5年後に自分が生きているかどうかすら、確証が持てない時代になってしまいました。それでも私は想像します。5年後の私は、授業で色んな方と触れ合いながら、さらに研究を深めて、本を何冊も出し、あちこちで講演をしていると思います。「先生の授業を受けてよかった」「英語を学ぶのは楽しいな」「ことばは奥が深いな」。こういった形で、様々な人の思考に刺激を与えられる人間でありたいです。5年後の自分を想像することは、自分がどういった人間でありたいか、考えることなのです。

地域研修報告会が開催される

12月5日(土)、「地域研修報告会」が開催されました。6会場(一部オンライン)で、延べ28ゼミが、研修成果の報告と質疑応答に臨みました。

地域研修は、2年次以降のゼミナール所属学生が履修する講義で、現地での研修を通して現実の生きた経済・社会を学ぶことを狙っています。

例年、履修学生は、4月以降、調査テーマの設定、各種資料の収集・分析などの事前学習に取り組み、そのうえで、夏休みを中心に数泊での現地研修を実施します。しかし、2020年度はコロナ禍のために、現地研修が実施できるか否か、不明な状況が続き、結果的に、当初予定した現地研修を実施できないゼミが多く発生しました。その場合には、文献研究や札幌近郊での調査といった手法で代替しました。

このように、イレギュラーな状況があったにもかかわらず、いずれのゼミも適切な「問い」の設定を行い、それを全体で共有して研修に臨んでいたようです。テーマは、一次産業を活用した地域活性化、過疎地の定住政策、等、北海道の地域課題に真摯に向き合ったものが多くみられました。

様々な制約下で実施された今の地域研修でしたが、今回の貴重な経験は、今後の学修や社会生活にとって大きな糧となるものと思われます。[浅妻]



[令和2年12月5日] 地域協働フィールドワーク

活動成果を冊子で発行



▲プロジェクトのロゴマーク

地域協働フィールドワークは、学生が地域に中・長期滞在し、地域の課題や可能性を探り、主体的に課題解決を提案・実行する「現場実践型」授業です。実践の場は羽根町天売島です。

学生が取り組んでいるプロジェクトの1つに、天売島の魅力を自ら発見して島の内外に伝えることを目的に、小冊子を発行することがあります。その第一弾として『学生がみた移り変わる天売島』を2019年2月に発行したのに続き、2020年8月に『学生の天売島観光ガイド てうりたび』を発行しました。2つの冊子は経済学部ウェブサイト (<https://econ.hgu.jp/>) で公開しています。

もう一つのプロジェクトは、天売島フェリーターミナルそばの空き店舗の活用です。この店舗を改装して、島民と観光客と学生が交流できるスペースにしました。店舗の名前は「てん」です。現在、そのウェブサイトの作成を進めています。交流イベントを一緒に作ってくれる島民や外部の方を募集したり、企画した交流イベントを発信したりするサイトを学生が構築しています。[水野谷]



写真: 左は『学生の天売島観光ガイドてうりたび』、下は空き店舗を活用した交流スペース「てん」



[令和3年2月・3月] キャリア支援センター

2021年 就職活動が本格化

新4年生を対象とした学内合同業界研究会(2月)・学内合同企業説明会(3月)が実施されました。4年生はすでに就職に向け活動が本格化しているのではないのでしょうか。スタートが遅れてしまった学生も落ち込む必要はありません(落ち込んでいる場合ではありません!)。最近の傾向として就職活動の期間が長期化しています。事実、学内の合同企業説明会は6月、10月にも予定されています。また、国家資格キャリアコンサルタントを保有するキャリア支援センターの職員が困っている皆さんをサポートします。あきらめずに頑張ってください。

「4年生は大変だな～」と思っている3年生も他人事ではありません。GIP(北海学園大学インターンシッププログラム)は既に動き出しています。6月には学園生のための就活支援サイト「ミナトコム」が利用可能となります。体験談を探せば(多少探す必要がありますが…)、どんな面接が実施されたか、何を質問されたか、場の雰囲気など、皆さんの知りたい情報を見つけることが可能です。また就活を終えた学生からの『先輩たちからの一言アドバイス』などを読むことができます。

「心配し過ぎず、安心し過ぎない」ために、まずはどんどん動いていきましょう。[逸見]



写真左: 2月に行われた学内合同業界研究会、写真右: 3月に行われた学内合同企業説明会